

遅い夏休みをとって、ラスベガスを訪れた。2泊3日の強行軍のため、カジノホテルを横目で見ながら、目的地である「核実験博物館」へ直行した。

ネバダと言えばベガス、砂漠に忽然と出現するネオンというイメージだが、実は米国核実験の9割が、ここネバダ州で実施されている。

1951年から1993年までに、828回の地下実験、100回の大気圏内実験が行われており、無数のクレーターは、火星と見紛うばかりだ。

米国最初の核実験は、1945年7月に行われたが、何とその翌月には広島、長崎に原爆を投下したわけだ。以来、米ソ冷戦下において、国威発揚の如く、核実験が繰り返され、核弾頭の9割を米ソで寡占する甚だ身勝手な核武装が定着してしまった。これらの核実験が、今では到底許されない情報統制と人権軽視により成り立っていたことは言うまでもない。そのため、米国においても、核実験は、「国民の誇り」であり、「夢の科学」でなければならなかった。

つまり、「核大国の道」へ進む国家や国民の姿勢は、今の北朝鮮の姿と通じるものがあり、また、そうあらねば、核保有などできはしないからだ。

その実力は未知数ながら、北朝鮮は核兵器を保有した。北朝鮮国民はそれを誇りに思い、歓喜するが、日本人には、その姿は異様にしか映らず、「もっと豊かな国の姿、国民の喜びがあるでしょ」と上から目線で人道を説き、軽蔑する。

では、運よく？核兵器を保有した国々は、

## 『NUCLEAR ORANGE BOMB』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

どういふ経緯でそれを実現したのだろうか。冷静になって考えてみると、その原点は北朝鮮と同じであり、国家存亡の危機管理の基本中の基本だからだ。そして、全ての核保有国にとって、そのプロセスで国民は「国威」を誇り、よもや後悔や反省はない。核保有国による核保有国のための「核軍縮」、持てる者の都合を、持たざる者へ強制する傲慢には、正義も倫理もあつたもんじやない。

今年ようやく国連で採択された「核兵器禁止条約」にも、核保有国とその同盟国は協議にすら参加しない傲慢ぶりではないか。国連に加盟していないながら、この条約に背を向けている国には、北朝鮮を非難する資格はなからう。

もはや、上から目線で人道を説くなど、身の程を知らない世間知らずだ。

さて、やっと訪れた「核実験博物館」、ここは、人類の悔悛の場ではなかった。売店では、きのこ雲のスノードームや、核爆弾ジュース？まで売られている。炭酸ジュースだから、その名も、NUCLEAR ORANGE BOMB!...

金正日前首領のピンラベルも生々しく、その味は決して甘くない。

広島、長崎では学べない、ほろ苦い現実の味だ。

憲法9条という感傷に浸り、まよかしの正義に酔うのは楽だが、そのツケは全て、未来の日本人に回される。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中